

るから、それよりも以前に畑村の稱があつた

とも思へぬ。若しそれがあつたら附近一地區

の後代に於ける字名であらう。後年のものでは、

越登賀三州志來因概覽に『畠城。敷地天

神山の近邊に在りしといふ。畑村は大聖寺埜

の方に在り。此の邑は畑時能の産地と云ふ。

然れども本朝通鑑には武州の産とあり。此の

畑村に古への極樂寺の遺跡ありといふ。按ず

るに畑村の名江沼郡に今なし。畑岡村あり、

是ならん。此の畑岡に城跡あり。圖にも見ゆ。

又極樂寺は今即ち極樂寺村あり。盛衰記に所

謂極樂林の遺跡これなるべし。』とあり、また

友懸紀開には『昔極樂寺と山岸との間に極樂

寺の出村あり。此村を畑村といひし也。』との

異説を述べ、江沼志稿は『極樂寺を畑村とい

ふ。上福田領山を畑山・畑の清水・畑の火・畑

山石・畑の弁坂と世人云傳へり。』とて、極樂寺

にも上福田にもある名稱の如く記する。

ハタイ 馬代 馬匹を贈遺するに金銀を以

て之に代へることをいうた。古くは金を以て

するを金馬代又は大馬代といひ、金(大判)一

枚とし、銀を以てするを銀馬代又は小馬代と

いひ、銀一枚即ち四十三匁を以て之に宛て

た。後世では銀三十枚を馬代としてゐる例も

見えるから、必ずしも定額がなかつたのでな

からうか。馬代には又太刀代を添へ、併せて

太刀馬代というてゐる。銀馬代の太刀代はそ

の半額を通例としたが、後世では七匁八分に

した例も見える。金馬代に對する太刀代は何

程であつたかは未だ考へ得ぬが、これも後世

では銀一枚を以て宛てたりしてゐる。

る音があるといふと記してある。

ハタケイハ 機具礎 羽咋郡領家七海の海

中に在る。集現岩の岩礎下部が海蝕によつて

洞門を作つてゐるもの。高さ一・一米、幅二・

米許。能登名跡志に『礎に機具岩とてあり。

其かたちながら機具に似たり。わざく

石工の作るともこれ程にはあるべからず。其

上波の寄する有さま、此あたり言辭に絶した

る所なり。』とある。

ハタケバシ 機具橋 河北郡向粟崎と西

蚊ヶ爪との間で、河北海の排水口大野川に掛

けられる。俳諧の後猿丸宮集に機具橋の記が

載せられ、安政丁巳その架換の行はれたこと

をいひ、その橋の名はこのあたりの川の名を

機具川といふから起るとしてゐる。

ハタケヤマイヘトシ 畠山家俊 能登畠山

氏の一族。通稱大隅。その姉は本願寺逆如の

側室で、堅田稱徳寺の寶賢、西證寺の寶順、

飯貝本善寺の寶幸、順興寺の寶從等の母とな

り、永正の末野村の坊で歿した。天文十九年

の役に見える將監は家俊の子である。

ハタケヤマウチ 畠山氏 畠山氏が能登の

守衛に任せられたのは義深の時に起り、滿慶

以降鹿島郡府中に在つて義元に及び、義元の

末年又は義總の初年から七尾城内に移り住ん

だものと思はれる。その世代を記したものは、

尊卑分脈・紋群書類等に數種あるが、何れ

も内容が同じくない。今これらを參照して、

略左の如くに考定する。そのうち徳宗と義統

若しくは義元との關係は明らかでない。

義統 義元庶政

保寧寺徳宗 義總 義續

義綱 義隆 義春

ハタケヤマウチジツキンシユウ 畠山氏

近衆 畠山氏の臣で、天野・松波・河野・神保・

三宅・笠松・土田・得田・豊田等をいふ。一に

御屋形衆といひ、八臣に次ぐ重臣であつた。

ハタケヤマウチハツシン 畠山氏八臣 遊

佐・温井・三宅・伊丹・甲斐庄・神保・平・豊田の

八家をいふ。長氏が之に加はらぬは、譜第で

ないからであらう。

ハタケヤマクロウ 畠山九郎 畠山義總の

兄である。天文日記天文七年八月六日の條に

よれば、當時九郎が加賀に在つて能登に還住

の策を講じたことが見えるが、爭議の内容は

明らかでない。

ハタケヤマゲンキヒヨウチユウ 畠山軍記

評註 一冊。文政庚寅所口市醫杉本義孔碩の

序がある。従來あつた翁物語は、中村秀介の

評註があるばかりで、畠山軍記と略同じいも

のであつた。それで杉本義は自寫の畠山軍記

を底本にして、翁物語の評註をそれに移した

のが此の書である。畠山氏の能登に下關した

ことから、その滅亡と長氏の苦闘を叙し、荒

山・石動山の戦に及ぶ。

ハタケヤマシヨウケン 畠山將監 畠山義

綱が能登から逐はれた時、將監も行を共にし

た。天正四年上杉謙信の能登に侵入した時、

將監亦之に従ひ、麻ヶ崎の守將となつた。同

十年六月廿四日附上杉景勝が能登に於いて所

左近將監とあるのも亦同人であらう。

ハタケヤマシヨウケンジ 畠山勝禪寺 畠

山義總の弟である。天文日記天文七年八月六

日の條に、九郎・勝禪寺・駿河の兄弟が能登に

還住を策するに就いて、本願寺の諒解を求め

たことが見える。この勝禪寺は畠山滿慶のこ

とではない。

ハタケヤマヌルガ 畠山駿河 畠山義總の

弟。義總の歿後、天文十六年閏七月駿河は加

賀・越中の一向宗門徒の援を得、能登に還住

せんとして押水に侵入したが、忽ち敗退して

戦死した。この事件の内容は詳かでない。

ハタケヤマトクソウ 畠山徳宗 義總の父

で、徳宗は道號であり、保寧寺とも保寧院と

もいうた。徳宗の出自は不明であるが、恐ら

くは義元又は義統の弟であらう。徳宗の忌辰

は、爲和卿集(冷泉)に『大永五年閏十一月十

八日畠山左衛門佐義總父保憲院身まかりける

云々』とあるによつて知られ、その保憲院は

保寧院の誤であらう。

ハタケヤマミツノリ 畠山滿則 ↓ハタケ

ヤマミツヨシ 畠山滿慶。

ハタケヤマミツヨシ 畠山滿慶 基國の次

子。修理大夫。初め兄滿家が將軍足利義滿の

意に忤つて屏居したから、基國の卒後滿慶家

を襲ぎ、能登・越中・河内・紀伊四國の守護を

兼ねたが、應永十五年義滿の薨するに及び、

自ら能登のみを領して矢田郷府中に居り、そ

の他を滿家に譲つた。滿慶最も和歌を好み、

晩年洛北大原に閑居したが、永享四年六月廿

七日六十一歳を以て卒し、勝禪寺眞源道祐と

謚せられた。尊卑分脈以下往々滿慶を滿則に

作つたものがある。當時の文書記録に一も滿

慶と誤記したものがある。

義深 基國 滿家

滿慶 義忠 義有

義元 義統 義總

義綱 義隆 義春

義元 義統 義總

義綱 義隆 義春

江沼志稿に、熊坂領山に在つて、土俗機を織